

首里城跡出土銭貨について

The Coins unearthed from the Shuri Castle Site

知念 隆博

CHINEN Takahiro

ABSTRACT: This paper presents the study and problems of old coins found from the shuri castle and adjacent sites. A variety of excavated coins consists mainly of the Sung dynasty type that was made before the construction of the castle, but also includes the 'kan -ei Tsu -ho(寛永通寶)' which is the latest of all. Therefore, it is supposed that there existed no particular classification among coin types at the time of Ryukyu dynasty. It is notable that the assemblage of the coin types show some localities. The further classification of the imitation coins and plain coins should be studied in the future.

1. はじめに

近年、中近世に相当する遺跡出土の銭貨についての研究は着実に蓄積され、また、発掘調査が増加することにより、さまざまな出土事例が報告されている。沖縄県においてもグスクや近世古墓の発掘調査が増加し、銭貨について得ることのできる資料は蓄積されている。

今回はかつて琉球王国の国王居城として、また、行政の中心であった首里城跡の発掘調査が行われた地点の成果を基に首里城跡出土銭貨について紹介する。首里城跡に関連する遺跡として、近隣に所在した天界寺跡、円覚寺跡、御細工所跡出土銭貨も参考にする。

2. 首里城跡の概要

首里城の築城年は明確ではないが、14世紀代に築城され、15世紀前半には基本的な構造は確立していたとされる（首里城研究グループ 1997）。その後、1879年の廃藩置県や熊本鎮台沖縄分遣隊の駐屯などを経て、昭和初期には正殿等の建物は国宝に指定される。しかし、1945年の第二次世界大戦により木造建造物は焼失し、城郭は破壊された。戦後は地形改変等により往時の面影をわずかに残すのみとなった（首里城研究グループ 1997）。

首里城跡周辺の復元整備は1956年の園比屋武御嶽石門、1957年の守礼門を始めとした一部で行われ、本格的な復元整備は1972年の本土復帰と同時に始まった。現在、城郭内は建造物を中心に復元整備が行われており、正殿、南殿、北殿などが復元・公開されている。また、城郭は平成13年度に復元整備が終了し、往時の姿を取り戻しつつある。

2000年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。

3. 各地点の出土資料

今回扱う資料は、発掘調査が行われ、報告書が刊行されている地点である首里城跡の南殿跡、北殿跡、御庭跡、奉神門跡、下之御庭、用物座跡、瑞泉門跡、廣福門跡、木曳門跡、継世門跡、外郭南側の管理用道路地区、首里城外の天界寺跡、円覚寺跡、御細工所跡出土の資料である。それぞれの出土銭種は表1に記載し、以下に各地点の各時代の銭種名および特徴的な資料を紹介する。

(1) 歓会門・久慶門内側地域（沖縄県教育委員会 1988）

歓会門・久慶門はともに石造拱門であり、木造平屋、入母屋造の檜を載せていた。原則として歓会門は男性専用、久慶門は女性専用の門であった（真栄平房敬 1997）。この二つの門および寒水川井戸に囲まれた地区で、水利施設等の遺構が検出されている。銭貨は1978点検出され、そのうち64.5%はひとつのトレンチから出土している。これは調査地に隣接する部分に銭蔵が存在したことが関係していると考えられる。

(2) 南殿跡（沖縄県教育委員会 1995）

南殿は正殿の南側に近接しており、日本様式が強く、薩摩の使者の歓待にも使用された。南殿跡出土の資料は渡来銭が主体となる。銭種が判明するものでは唐銭14点2種、北宋銭75点17種、南宋銭1点、明銭23点2種、清銭1点、琉球銭11点、寛永通寶（新寛永）となっており、その他に無文銭と不明が317点となっている。興味深い資料は図2-1「大世通寶」であり、拓本では不鮮明だが「世」と「寶」の間に穴が穿かれている。

(3) 北殿跡（沖縄県教育委員会 1995）

正殿の北側に位置し、中国様式であり、冊封使の歓待や行政施設として使用されていた建物である。北殿跡出土銭貨のうち銭種が判明するものは唐銭1種、北宋銭11種、明銭1種、清銭1種、琉球銭1種、寛永通寶（新寛永）があり、その他に無文銭がある。主体となるのは北宋銭である。

(4) 御庭跡（沖縄県教育委員会 1998）

御庭は四方を正殿、南殿、番所、奉神門、北殿に囲まれた広場であり、冊封、朝拝などのさまざまな儀式が行われた空間であった（首里城研究グループ 1997）。この御庭跡からは至道元寶が1点ピットより出土している。同ピットより青磁が出土している。

(5) 奉神門跡（沖縄県教育委員会 1998）

奉神門は御庭を間において正殿と対峙する形で位置しており、門としての役割と薬類や茶などの出納などの役割を果たしていた（首里城研究グループ 1997）。奉神門跡出土の銭貨総数は152枚であり、唐銭1種、北宋銭6種、明銭2種、清銭1種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、無文銭、輪銭が得られている。図2-2は3枚が溶着した状態で検出され、そのうち銭種が判明する銭貨は「元祐通寶」であり、「祐」と「通」の間に穴が穿かれている。また、図2-3は縁はあるが銭文が無い無文銭である。

(6) 下之御庭跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c）

首里城内郭の第二の門である廣福門と京の内、奉神門の間の空間をいう。銭貨は265点出土している。銭種の組み合わせは不明だが、特徴的な資料として図2-4・5の琉球銭の大世通寶、世高通寶が出土している。

(7) 廣福門跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c）

首里城内郭第二の木造の門であり、両脇の東側には戸籍に関することや争いに関する役所である大与座、西側には神社仏閣を扱う寺社座があった。出土銭貨は92点あり、図2-6の正隆元寶が1点出

土している。この資料は字間4ヶ所に穿孔されており、「隆」および「寶」の外側が取り除かれている。

表1 各地点出土銭種表

出土地点		歙会門・ 久慶門	南殿跡	北殿跡	御庭跡	奉神門跡	下之御庭跡	用物座跡	廣福門跡	木曳門跡	瑞泉門跡	継世門跡	管理用道路	円覚寺跡	天界寺跡	御細工所跡
銭種	初鑄年															
前漢																
四銖半兩	B.C.175															
貨泉	14									○						○
五銖		○								○						○
唐																
開元通寶			○	○		○				○		○	○	○	○	
乾元重寶	758									○		○	○	○	○	
北宋																
太平通寶	976		○													
淳化元寶	990		○													○
至道元寶	995	○	○		○	○										
咸平元寶	998	○								○						
景德元寶	1004		○							○						○
祥符元寶	1008									○		○				○
祥符通寶	1009		○	○			○			○						
天禧通寶	1017		○	○												
天聖元寶	1023	○	○	○												
景祐元寶	1034	○									○					○
皇宋通寶	1039		○	○		○										
至和通寶	1054															○
嘉祐通寶	1056		○	○						○						
治平元寶	1064		○											○		○
熙寧元寶	1068		○	○		○										
熙寧重寶	1071									○		○	○	○	○	
元豐通寶	1078			○		○										
元祐通寶	1086	○	○	○		○				○		○				○
紹聖通寶	1094		○			○				○		○				○
元符通寶	1098									○				○		○
聖宋元寶	1101		○	○												○
崇寧通寶	1102		○													○
崇寧重寶	1103															
大觀通寶	1107	○	○	○												○
政和通寶	1111		○	○		○	○									○
宣和通寶	1119									○		○				○
金																
正隆元寶	1157								○							
南宋																
淳熙元寶	1174															
慶元通寶	1195															○
咸淳元寶	1266		○													○
紹定通寶	1228															
明																
大中通寶	1361									○						
洪武通寶	1368	○	○	○		○	○			○		○	○	○	○	
永樂通寶	1408		○			○				○		○	○	○	○	
清																
康熙通寶	1662															
乾隆通寶	1736		○	○		○		○				○				○
道光通寶	1821											○		○		○
日本錢																
寬永通寶	1636	○				○			○			○	○	○	○	
寬永通寶	1668											○	○	○	○	
寬永通寶	1697	○	○	○		○	○					○	○	○	○	
仙臺通寶	1784											○	○	○	○	○
文久永寶	1863															○
朝鮮錢																
朝鮮通寶	1423															
琉球錢																
大世通寶	1454		○	○			○			○						
世高通寶	1461	○					○									
金圓世寶	1470															○?
その他																
無文錢		○	○			○										
輪錢						○			○		○	○	○	○	○	
雁首錢								○				○	○	○	○	

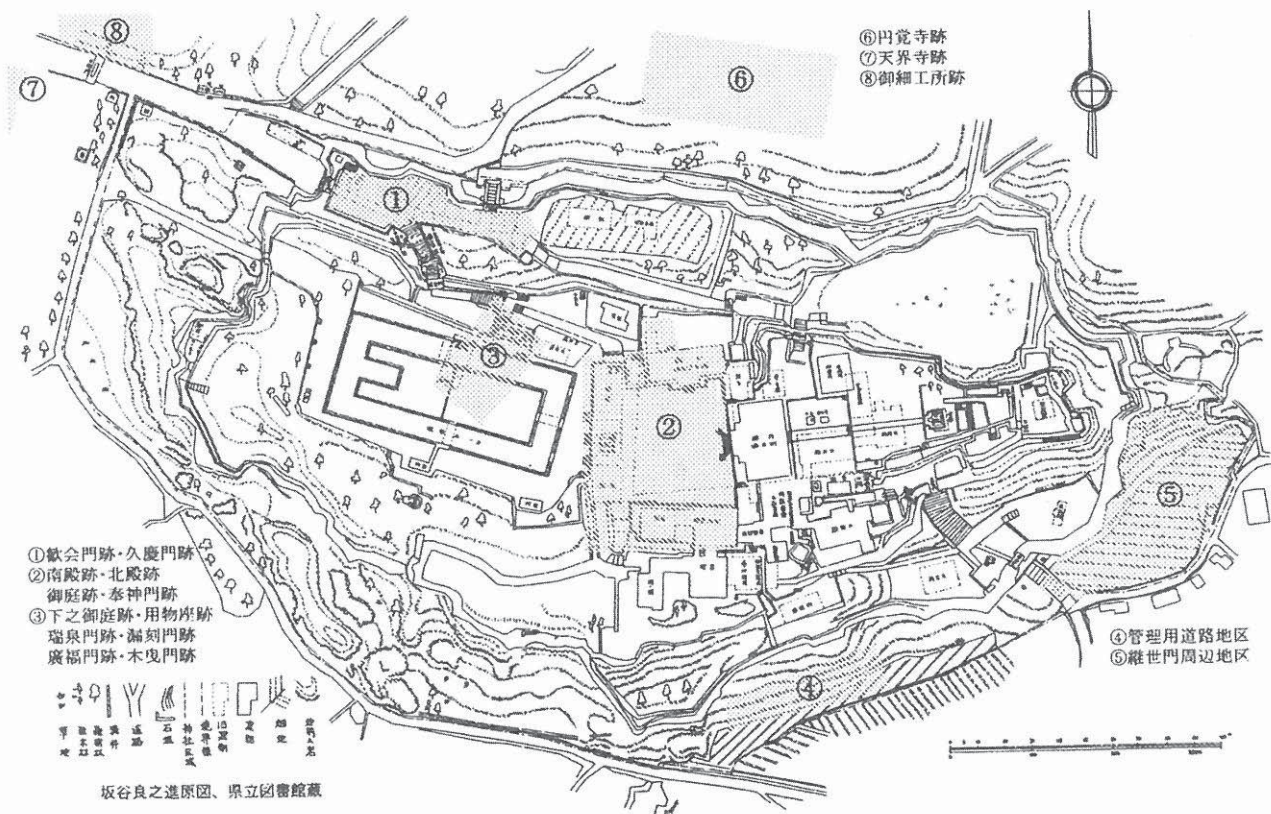


図1 首里城平面図

(8) 木曳門跡 (沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c)

木曳門は城郭の西端に位置し、通常は石で塞がれ、城内へ木材を搬入する際に開かれた。この木曳門周辺からは585点の銭貨が出土している。銭種が判明するものは21種あり、内訳としては貨泉、五銖、唐銭1種、北宋銭12種、明銭3種、清銭1種、琉球銭1種、無文銭となっている。図2-7「皇宋通寶」は孔が90°ずれ、菱形を呈している。図2-8「皇宋通寶」は、図2-7のように始めは菱形を穿孔し、その後通常の穿孔した結果、孔が星孔(小畑弘己 2002)となっている可能性を示す資料である。

(9) 繼世門跡 (沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b)

繼世門は正殿の南東側城郭にあり、石造拱門でその上に入母屋造の櫓をのせていた。通常は通用門として使用し、国王が死去した場合には世継の王子がこの門から城内に入った。出土した銭貨は合計で40点あり、唐銭1種、北宋銭3種、明銭2種、清銭2種、寛永通寶(古寛永、新寛永)、無文銭が確認されている。特徴的な資料として図2-9の無文銭がある。円形ではなく、撫角形なので、踏み返し技法(永井久美男 2001)による結果として銭文を失ったとすると、仙臺通寶が本銭の可能性はある。

(10) 管理用道路地区 (沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a)

この地区は外郭南側斜面一帯であり、石敷遺構が検出されている。銭貨は39点出土し、唐銭1種、北宋銭3種、明銭1種、清銭1種、寛永通寶(古寛永、新寛永)、無文銭、輪銭となっている。模鋳

銭として報告されている資料が3点あることは注目される。

(ii) 円覚寺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b）

円覚寺は1494年に完成した臨済宗の沖縄総本山であった。昭和8年には総門、放生池、三門、仏殿、鐘楼、獅子窟、龍淵殿が国宝に指定されるが、第二次世界大戦により焼失する。その後、昭和43年より整備が行われ、総門、左掖門、放生池、放生橋が復元・修理されている。調査は1997年～2001年まで行われ、さまざまな遺構が検出されている。出土した銭貨は総数104点であり、唐銭1種、北宋銭3種、南宋銭1種、明銭2種、清銭2種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、無文銭、輪銭が検出されている。表採や攪乱層出土のものが多く、遺構に伴うものとして、開元通寶、洪武通寶、古寛永通寶、無文銭が出土している。1点だが加治木銭洪武通寶が出土している。

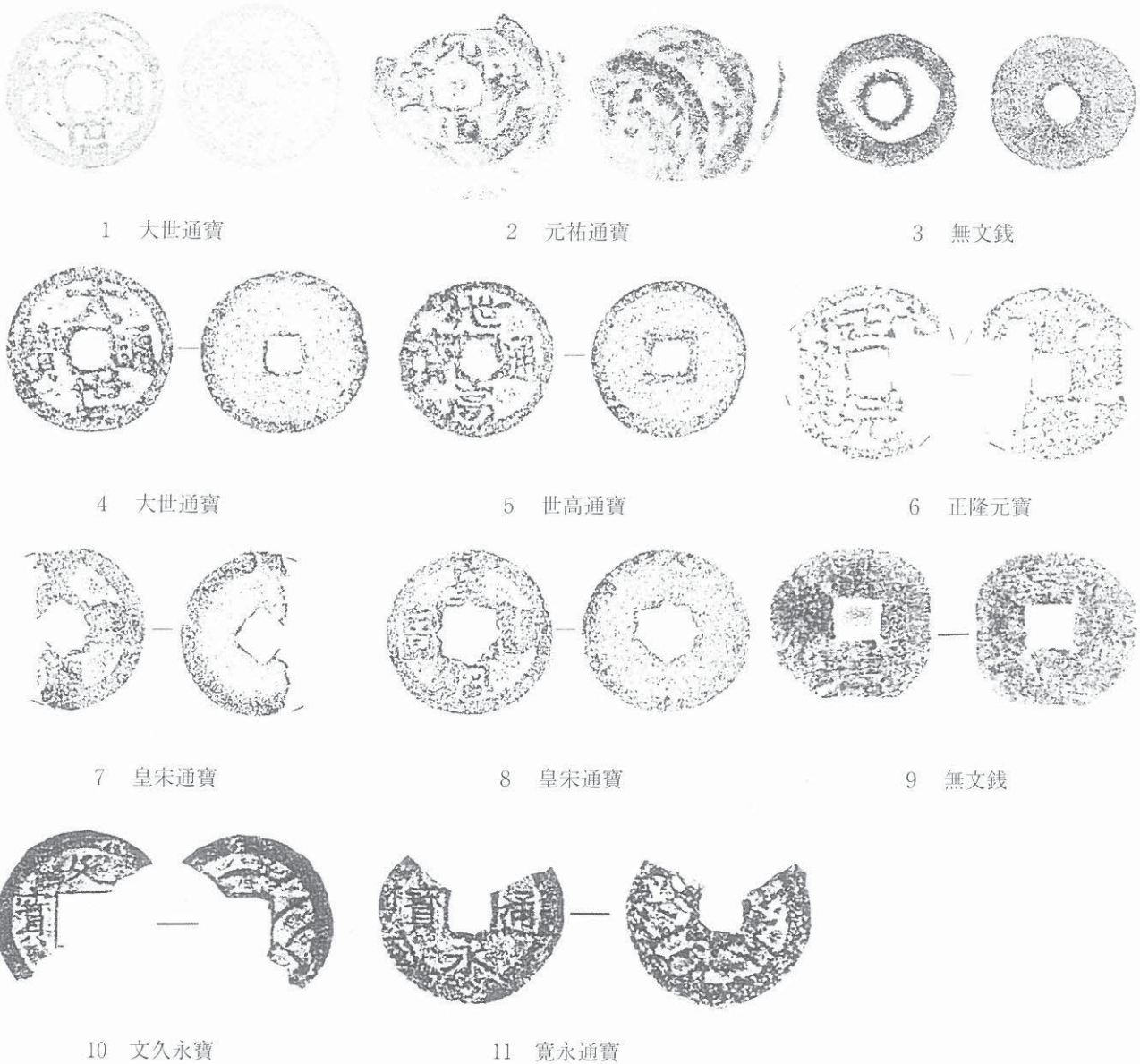


図2 銭貨拓影

(12) 天界寺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b・2002a、那覇市教育委員会 1999・2000）

天界寺は景泰年間（1450～1456）に創建され、首里城の西側に位置し、綾門大道に沿うように展開していたとされる。円覚寺、天王寺とともに三大寺と呼ばれるが、明治末に廃寺となった。首里城跡、円覚寺、天界寺、御細工所のなかでは最も銭種が多く、出土点数も多い。四銖半両をはじめとして、貨泉、唐銭2種、北宋銭16種、南宋銭2種、明銭2種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、琉球銭1種、無文銭、輪銭まで続いている。注目される資料としては、図示されていないが金圓世寶と思われるものである。

(13) 御細工所跡（那覇市教育委員会 1991）

御細工所は漆工芸、金工芸などの王府御用品の製作所であったのではないかと考えられている。出土した銭貨は5点と少ないが、図2-10・11の文久通寶、寛永通寶の背に波紋を有する資料が各1点得られている。

4. 今後の課題

上記では首里城跡の各地点および周辺の円覚寺跡、天界寺跡、御細工所跡出土の銭貨を略述したが、ここでは各地点出土の銭種から見出される特徴を紹介し、今後の課題を若干記す。

今回紹介した各地点では、出土銭貨の研究として取り上げられることの多い大量一括出土銭や墓から一括して出土するような資料は無かった。それは第二次世界大戦の砲撃やその後の施設建設の際に遺構破壊や地形改変が行われたことも一因と考えられるが、発掘調査では検出されていない。しかし、攪乱層や盛土といった遺構や層序と直接関係のない部分からではあるが銭種不明、現代銭も含め5510点余の銭貨が出土していることは注目に値する。各地点で出土枚数が300点以上の地点でみると、歓会門・久慶門内側地域が総計1978点で最古銭が開元通寶、最新銭が乾隆通寶となっており、南殿・北殿がそれぞれ489点と328点で、最古銭は開元通寶、最新銭は乾隆通寶となっている。木曳門は585点で最古銭は貨泉、最新銭は道光通寶となっている。周辺の遺跡では天界寺が総計1211点で最古銭が四銖半両、最新銭が寛永通寶である。これらの銭種をみると、四銖半両、貨泉や開元通寶と首里城が築城される以前の銭貨が出土している。また、首里城築城以前の北宋銭が最も多く、使用される際には古いものや新しいものという考えはなく、銭貨という大きなまとまりとして捉えられていたと考えられる。そのようなことから首里城跡においては、銭貨による遺構等の年代の決定は慎重に行う必要がある。

今回使用した資料では模鑄銭を区別して報告しているのは管理用道路地区だけであった。今後は銭文による分類だけでなく、模鑄銭や私鑄銭による分類を行い、数量や出土銭貨における割合を導き出す必要がある。なお、銭文を判別する際に透過X線撮影装置を活用すると、鏽や銭文の潰れなどによって読み取れない資料も鮮明に見えるので、かなりの割合で銭種を同定することができる。現在では無文銭として捉えられている資料も透過X線撮影の結果、元の銭種が判明する可能性もある。

また、出土枚数は少ないが、穴があいているものや加工されているものがある。穴があいているものに関しては、銭貨の形態をとどめているが、図2-6のように左右が加工され、銭文間に穴があいているものは銭貨として使用されたのか疑問が残る。

今回はほとんど触れることが出来なかったが、今後注目されるものとして無文銭がある。沖縄でも銭貨を出土する大部分の遺跡では鳩目銭とよばれる無文銭が出土するが、注目される遺物として取り上げられることは少ない。しかし、近年では無文銭が東北地方でも多量に出土することが判明し、東

北中世考古学会を中心に研究が進められ、東北地方の無文銭は洪武通寶→無文銭→輪銭という変遷図が推察できるまで進んでいる。沖縄においても無文銭の集計、出土状況の研究を行うことによって、無文銭と輪銭の関係が東北地方と同様なのか、それとも異にするのかという特徴が表れてくると考える。今後の課題として注意深くみていきたい。

(ちねん たかひろ：調査課 専門員)

引用・参考文献

- 大庭康時 2001 「トピックⅢ九州・沖縄の出土中世模鑄銭」『中世の出土模鑄銭』高志書院
- 沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』
- 沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡—南殿・北殿跡遺構調査報告書』沖縄県文化財調査報告書 第120集
- 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡—御庭跡・奉神門跡遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書 第133集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集
- 2001b 『天界寺跡（Ⅰ）—首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集
- 2001c 『首里城跡—下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002a 『天界寺跡（Ⅱ）—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集
- 2002b 『首里城跡—継世門周辺地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第9集
- 2002c 『円覚寺跡—遺構確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集
- 小畑弘己 1997 「九州・沖縄における出土銭貨研究の現状と課題—九州・沖縄銭貨出土遺跡地名表—」『先史学・考古学論集Ⅱ』龍田考古会
- 2002 「九州・沖縄地方」『季刊 考古学』第78号 雄山閣
- 是光吉基 1993 「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『潮見浩先生退官記念 考古論集』潮見浩退官記念事業会
- 坂詰秀一編 1986 『出土渡来銭—中世—』考古学ライブラリー45 ニュー・サイエンス社
- 首里城研究グループ 1997 『首里城入門—その建築と歴史—』ひるぎ社
- 嵩元政秀 1970 「沖縄県内出土の銭貨について」『南島考古』創刊号 沖縄考古学会
- 永井久美男 1998 『近世の出土銭Ⅱ—分類図版篇—』兵庫埋蔵銭調査会
- 2001 「模鑄銭の全国的様相」『中世の出土模鑄銭』高志書院
- 2002a 『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 2002b 「出土銭貨調査の課題」『季刊 考古学』第78号 雄山閣
- 2001c 「14世紀代における流通銭」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会
- 那覇市教育委員会 1991 『御細工所跡—城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告書第18集
- 1999 『天界寺跡—首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告第42集

2000 『天界寺跡—首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告第43集

日本貨幣商協同組合 1998 『日本の貨幣—収集の手引き—』

真栄平房敬 1997 『首里城入門』ひるぎ社

渡辺昇 1997 『明石城下町の出土銭』『近世の出土銭 I—論考篇—』兵庫埋蔵銭調査会